

文化資本と教育アスピレーション

—読書文化資本・芸術文化資本の相続と獲得—

片瀬 一男*

Cultural Capital and Educational Aspiration: The Inheritance and Acquisition of Reading and Artistic Cultural Capitals

Kazuo KATASE

In this paper, we examine the relationship between high school students' cultural capital and educational aspiration. We find that there is difference of cultural capital among social strata. The inheritance and acquisition of reading and artistic cultural capital between generations are rather complex processes. We also find that though reading cultural capital warms up educational aspiration of both male and female students, artistic cultural capital does so only for females. And reading cultural capital warms up aspiration not in cognitive dimension but in attitudinal dimension. These results suggest that in Japanese society in which school culture lacks class base, rather than high-brow artistic cultural capital, reading cultural capital that has affinity for school culture is acquired in schools and develops high school students' educational aspiration.

Key Words: Cultural Capital, Educational Aspiration, Reading and Artistic Cultural Capital

* 東北学院大学教養学部教授

1. はじめに

家族における文化資本の「相続」は、少子化戦略や学校外投資戦略（片岡、1998a、2001、片瀬、2003）とならんで、家族における有力な教育戦略（再生産戦略）の1つである。ピエール・ブルデューらの文化的再生産の理論（Bourdieu et Passeron, 1979=1991）によれば、家族内で相続される文化資本は、学校教育をつうじて、「制度化された文化資本」である学歴に転換され、教育選抜システムにおける高い「収益」を生むとされてきた。すなわち、階層的地位の高い家族においては、親から子どもへと、その社会で「正統」とみなされた文化的素養や趣味・知識が伝達される。そして、こうした正統的な文化は、学校教育で教えられる文化的知識と親和性をもっているため、家族において正統的な文化資本を受け継いだ子どもは、学校という教育選抜システムにおいて、よりよい学業成績をあげたり、より高い学歴を獲得するといった「収益」を得ることが可能になる。そして、高い学歴はさらに労働市場や婚姻市場といった「場」においても、より高い地位の達成を可能にする。つまり、家族内で伝達・相続される文化資本によって、階層構造が世代間で文化的に再生産されていくとされるのである。

しかし、フランスで展開されてきた文化的再生産の理論を、日本社会における教育達成の分析に適用するには、いくつかの留意すべき点があると思われる。その1つは、日本の学校において制度化された「正統的文化」が、日本の伝統文化と断絶した西欧文化であることである。すなわち、後発的近代化をはかった日本は、学校制度をつうじて西欧文化を採用・普及させることによって、近代化をおしすすめてきた。そのため、日本の伝統的な上流階層文化と学校が

正統化する文化（学校文化）の間には断絶がみられる⁽¹⁾。したがって、日本の高等学歴保持者が保有する文化資本は、家族において伝達された「相続文化資本」であるより、学校教育をつうじて学ばれた「獲得文化資本」（宮島、1994）である可能性も高い。このように後発的近代化をとげた社会に特有の文化資本のあり方を、大前（2002）は「キャッチアップ文化資本」と呼んだ。

さらに、こうした日本の近代化のあり方は、学校文化の脱階層化を生んだとの指摘もなされている。すなわち、西欧社会（とくにフランス社会）と比べて、学校文化が伝統的な上流階層文化と断絶して階層中立的な性格をもつこと、それゆえ階層文化から自立した透明性の高い教育選抜がおこなわれているというのである（荻谷、1995、竹内、1995）。このことは、イギリス（Sullivan, 2001）やオランダ（De Graaf, De Graaf and Kraaykamp, 2000）、オーストラリア（Croock, 1997）において、文化資本と教育達成の関係を検討した結果からも指摘されている。それによると、高い教育達成を可能にする文化資本は、上流階層文化に特有の美的・芸術的趣味（Bourdieu, 1997a=1990）というより、学校文化とりわけ認知的技能と親和性をもつ読書文化資本だということである⁽²⁾。

このように、文化的再生産の理論を日本社会に適用するには、いくつかの制約条件があるにもかかわらず、現代日本においても階層的基盤をもつ文化資本の「相続」が家族の有力な再生産戦略として機能し、教育達成や地位達成において効果をもつことが明らかにされてきたことも事実である。すなわち、1995年の「社会階層と社会移動に関する全国調査」（SSM調査）において、幼少時文化資本（読書文化資本と芸

術文化資本)が教育達成におよぼす影響について検討がおこなわれた(片岡、1998a、1998b)。そして、性別によって影響の仕方は異なるものの、幼少時文化資本は、教育達成に対して一定の効果をもたらすことが明らかにされている。それによると、男性の場合は、文化資本の相続が教育システムの内部において部分的に収益をあげるにとどまり、文化資本の相続戦略より学校外教育投資の方が有効であったのに対して、女性の場合、文化資本による教育選抜が強く作動し、中学3年次成績やエリート高校参入、最終的な学歴達成にまで影響をおよぼしているという。実際、片岡(1998b)によると、たしかに女性においては若いコーホートになるほど、メリトクラシー化が進行し、中学3年次成績が学歴達成におよぼす効果が増大している。しかし、女性においては、相続文化資本が初期の文化的選抜によって中学3年次の成績に変換され、その後は成績原理によるメリトクラティックな教育選抜をつうじて高い学歴が獲得される。この点で、とりわけ女性においては、メリトクラシーの貫徹にもかかわらず、その背後に相続文化資本による文化的再生産のメカニズムがはたらいっているのである⁽³⁾。

この研究でとりあげられてきたのは、主として幼少時の文化資本⁽⁴⁾が教育達成におよぼす効果であった。たしかに、文化資本が家族内で時間をかけて蓄積・身体化されるものであることを考えるならば、幼少時文化資本の影響に着目することには意義があると考えられる。しかし、その一方で、実際の進路分化あるいは教育選抜がおこなわれる高校時点に注目し、この段階で文化資本の「相続」がどのようにおこなわれているか、またそれが高校生の教育アスピレーションの形成にどのように影響しているか検討す

ることによって、文化資本が教育達成に効果をおよぼすメカニズムをより詳細にとらえることができる。

そこで、以下では、まず第1に、従来から教育達成に影響をおよぼすとみられてきた読書文化資本と芸術文化資本をとりあげ、実際にこれらの文化資本の保有状況に階層差がみられるか検討をおこなう。第2に、読書文化資本と芸術文化資本がどのように親から子どもへ相続・伝達されているのか分析をくわえる。その際、これらの文化資本が実際に家族における「相続文化資本」なのか、それとも学校教育による「獲得文化資本」なのか考察する。そして、第3に、読書文化資本と芸術文化資本が高校生の教育アスピレーションにどのような影響を与えているか検討をおこなう。また、読書文化資本と芸術文化資本では、教育アスピレーションにおよぼす効果に違いがあるのか検討する。それによって、日本社会特有の文化資本の作動メカニズムの一端が明らかになるだろう。

なお、以下の分析で用いるデータは、1999年に東北大学教育文化研究会が仙台圏の11の高校の2年生とその父母を対象におこなった「教育と社会に対する高校生の意識：第4次調査」(片瀬、2001a)のデータである。実際に文化資本としてとりあげる変数は

- (1) 芸術文化資本：「クラシック音楽を聴く」頻度
- (2) 読書文化資本：「文学作品や歴史の本を読む」頻度

であり、いずれも「よくする」から「まったくしない」の5段階で高校生とその父母にたずねられている。これは実際におこなわれている文化的活動の頻度をたずねたものであり、文化資本の様態(Bourdieu, 1979b=1986)からすると、

「身体化された文化資本」にあたる⁽⁵⁾。

2. 社会階層と文化資本

まず最初に、親世代の文化資本に注目し、それに階層差が存在するかみてみよう。ここでは、芸術文化資本および読書文化資本について、「よくする」と「ときどきする」を合計したものを活動比率とし、学歴や職業によってこの活動比率に差異が見られるか検討をおこなう。

2.1. 父親の文化資本における階層差

まず、父親について学歴・職業によって文化資本に差異があるかみてみよう。図1aは父親の学歴ごとに、また図1bは父親の職業ごとに、読書文化資本および芸術文化資本の活動比率を示したものである。

まず学歴についてみれば（図1a）、初等・中等学歴に比べ、高等学歴の父親の方が、芸術文

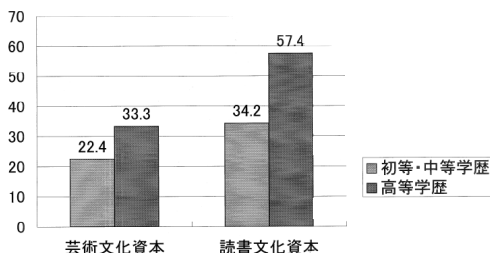


図1a 父学歴と文化資本
:「よくする」「ときどきする」の合計(以下同様)

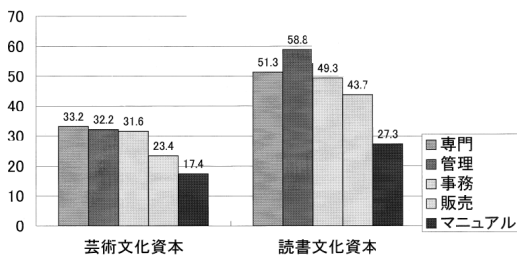


図1b 父職と文化資本
・マニュアルには農業も含む(以下同様)

化資本についても、読書文化資本についても、活動比率が高くなっている。また、芸術文化資本と読書文化資本を比較すると、読書文化資本の方が学歴差が大きいことがわかる。

他方、父職との関連についてみると（図1b）、芸術文化資本の場合、専門職・管理職・事務職でいずれも「よくする」「ときどきする」者が3割強と差がないが、販売職では2割強、マニュアル職では2割弱と少なくなる。つまり、芸術文化資本に関しては、同じホワイトカラー層でも事務職と販売職の間に格差があるといえる。他方、読書文化資本についてみると、活動比率は、管理職で6割近くと最も高く、専門職・事務職がこれに次いで約5割となっている。そして、読書文化資本と同様、販売職はホワイトカラー層の中でも比率が低く、マニュアル職ではさらに低くなっている。

以上のことから、学歴に関しても、職業に関しても、階層上の地位の高い父親の方が、芸術文化資本も読書文化資本も多く保有していることがわかる⁽⁶⁾。

2.2. 母親の文化資本における階層差

次に、母親の学歴・職業と文化資本の関係は、図2aおよび図2bに示した。

まず学歴についてみれば、父親と同様、初等・中等学歴に比べ、高等学歴の母親の方が、

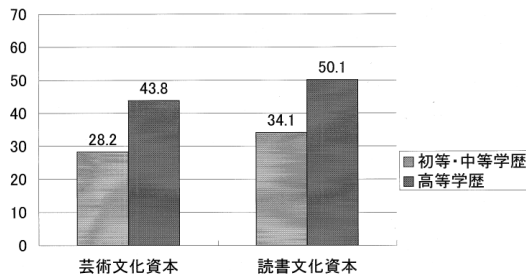


図2a 母学歴と文化資本

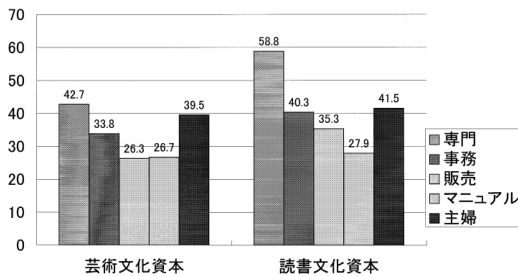


図2b 母職と文化資本: 専門には管理も含む

芸術文化資本についても、読書文化資本についても、「よくする」「ときどきする」者が多くなっている。ただし、同じ学歴水準で父親と母親の文化資本を比べると、芸術文化資本でも読書文化資本でも、初等・中等学歴では父母の活動比率にあまり差がないが、高等学歴においては父母で活動比率に差がみられる。すなわち、同じ高等学歴である場合、芸術文化資本では母親の活動率が父親の活動率を10%近く上回り、逆に読書文化資本では父親が母親を7%ほど上回っている。このことからすると、高学歴の親においては、芸術文化資本は父親よりも母親が担い、読書文化資本は母親よりも父親が担うといった差異が存在し、いわば文化資本の伝達における父母の分業といった観を呈している。

他方、図2bで母職との関連についてみると、芸術文化資本に関しては、専門・管理職で最も活動率が高く、主婦と事務職がこれに次いでいる。これに対して、販売職・マニュアル職では活動率が2割台にとどまっている。また、読書文化資本に関しても、専門・管理職で最も活動率が高く、次いで主婦・事務職の活動率が高くなっている。

以上のことから、父親と同様、学歴に関しても、職業に関しても、階層上の地位の高い母親の方が、芸術文化資本も読書文化資本も多く保

有していることがわかる。また、主婦層は、文化資本に関しては、専門職や事務職といったホワイトカラー層に近い水準にあるといえよう。このことからする、これらの文化資本は、父親の場合も、母親の場合も、階層的基盤をもつものといっていよう。

3. 文化資本の相続

3.1. 文化資本の親子間相関

では、こうした親世代の文化資本は、子どもの世代へ「相続」されているのだろうか。このことを確かめるために、芸術文化資本および読書文化資本について、その活動頻度に応じて1～5点のスコアを与え、親子間で相関係数を計算したものが表1である。

この表1からは次のことがいえる。まず第1に、芸術文化資本についても、読書文化資本についても、すべての親子関係において有意な正の相関がみられ、親の文化資本の保有量が多いほど、子どもの文化資本も多くなるのがわかる。第2に、芸術文化資本と読書文化資本の親子間相関を比較すると、全般的にみて、読書文化資本よりも芸術文化資本の方が親子間相関が強いことがわかる。つまり、芸術文化資本は、読書文化資本よりも親子間で伝達される傾向が強いといえる。第3に、芸術文化資本に着目すると、「母-娘」の相関が最も強く、「父-娘」の相関がこれに次いでいる。これに対して、「父-息子」「母-息子」の相関は相対的に低い

表1 文化資本の親子間相関

文化資本	親子関係			
	父-息子	父-娘	母-息子	母-娘
芸術文化資本	0.16**	0.23**	0.12**	0.35**
読書文化資本	0.11*	0.11*	0.18**	0.20**

注) **:p<0.01, *:p<0.05

とみることができる。このことからすると、芸術文化資本は、父母いずれからも娘には伝達されやすいが、息子には伝達されにくいことが推察される。第4に、読書文化資本に関しては、「母-娘」「母-息子」の相関が強く、これに比べると「父-息子」「父-娘」の相関は弱くなっている。したがって、読書文化資本に関しては、息子の場合も、娘の場合も、父親よりも母親から影響を受けやすいことがわかる。

3.2. 子どもの文化資本の規定因

そこで、以上の分析をふまえて、実際に子どもの文化資本を規定している要因について検討していこう。ここでは、子どもの出身背景となる親の学歴、親の文化資本、さらには子どもの在籍する高校ランク⁽⁷⁾を考慮に入れたうえで、親世代の文化資本が子どもの文化資本にどのように影響しているのか分析をおこなう。ここで、高校ランクを考慮するのは、子どもの文化資本が学校をつうじて学習された「獲得文化資本」であるかどうかを検討するためである。

(1) 芸術文化資本の規定因

まず、子どもの芸術文化資本を規定する要因について、パス解析をもちいて検討をおこなう。パスモデルは、図3a(男子高校生)、図3b(女

子高校生)に示したように、まず出身背景となる父学歴と母学歴が、それぞれ父親・母親の芸術文化資本を規定するとともに、子どもの高校ランクを規定し、さらにこの親の芸術文化資本と高校ランクが子どもの芸術文化資本に影響するというモデルである。このモデルで、親の芸術文化資本から子どもの芸術文化資本に至るパスが有意な効果をもつならば、子どもの芸術文化資本は親から伝達された「相続文化資本」であることになる。これに対して、学校ランクが有意な効果をもつならば、子どもの芸術文化資本は、学校による「獲得文化資本」である可能性があることになる。

まず、図3aの男子高校生についての分析結果からみていこう。このパス図によると、父学歴・母学歴はそれぞれの芸術文化資本を強く規定する(父母を比較すると、とりわけ母親の芸術文化資本は、学歴に強く規定されている)と同時に、子どもの高校ランクにも強い影響を与えている。次に、父親と母親の芸術文化資本は、子どもの芸術文化資本に有意な影響をおよぼしている。父母の影響を比べた場合、父親からの影響が母親からの影響を上回っている。これに対して、高校ランクは子どもの芸術文化資本に有意な効果をもっていない。このことから考えて、高校ランクも考慮に入れると、男子の芸術

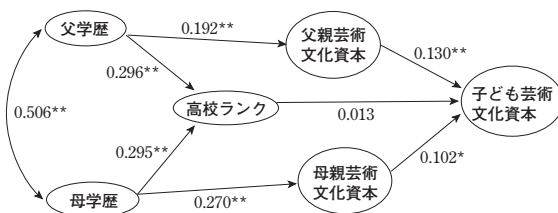


図3a 芸術文化資本の規定因(男子高校生)
注) **:p<0.01, *:p<0.05

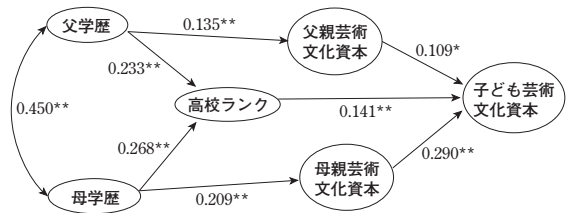


図3b 芸術文化資本の規定因(女子高校生)
注) **:p<0.01, *:p<0.05

文化資本は、学校で獲得される文化資本というより、親とりわけ父親から相続された文化資本であるとみることができる。

次に、図3bの女子高校生の分析結果をみてみよう。まず、男子の場合と同様、父学歴・母学歴は、それぞれの芸術文化資本を規定すると同時に、子どもの在籍する高校ランクを強く規定している。そして、父母の芸術文化資本は、子どもの芸術文化資本に有意な規定力をおよぼしている。また父母の影響を比べると、父親よりも母親の芸術文化資本が子どもに与える影響が大きい。その規定力は男子の場合よりも大きく、文化資本は「母から娘へ」伝達されるという知見(片岡, 1997)が再確認された。その一方で、男子と異なり、高校ランクが女子の芸術文化資本に有意な影響を与えていることも注目される。この点からすると、女子の芸術文化資本はとりわけ母親から「相続」される側面と、ランクの高い高校に入学することによって「獲得」される側面をもつものといえよう。

(2) 読書文化資本の規定因

同様に、図4aおよび図4bには、子どもの読書文化資本を規定する要因を、子どもの性別ごとにパスモデルをもちいて分析した結果を示した。

まず、図4aの男子高校生の分析結果からみて

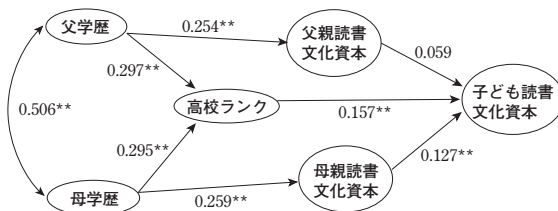


図 4a 読書文化資本の規定因 (男子高校生)
注) **:p<0.01, *:p<0.05

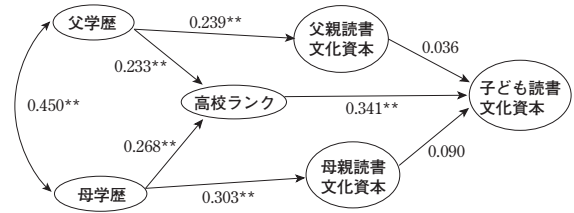


図 4b 読書文化資本の規定因 (女子高校生)
注) **:p<0.01, *:p<0.05

いこう。父学歴・母学歴がそれぞれの読書文化資本および子どもの高校ランクを強く規定している点は、これまでと同様である。次に、親の読書文化資本が子どもの読書文化資本におよぼす影響をみると、母親の読書文化資本の影響は有意だが、父親の影響は有意ではない。つまり、男子高校生はもっぱら母親の読書文化資本を「相続」していることになる。また、その一方で高校ランクも母親の影響におとらず強い影響をおよぼしている。このことからみて、男子高校生の読書文化資本は母親から「相続」するものであると同時に、ランクの高い高校に入ることによって「獲得」されるものでもあるといえる。

他方、女子高校生の場合はどうだろうか。図4bにおいては、これまで同様、父学歴と母学歴がそれぞれの読書文化資本を規定するとともに、高校ランクにも大きな規定力をおよぼしている。次に、子どもの読書文化資本への影響をみると、父母の読書文化の影響はいずれも有意なものではなく、高校ランクがきわめて大きな影響力をもっていることが注目される。つまり、女子高校生の読書文化資本は、親から「相続」されるものではなく、高校をつうじて「獲得」されるものであると考えられる。そして、親学歴から高校ランクへの規定力が高いことから考

えて、親の学歴資本は子どもの高校ランクという学歴資本に転換され、それが子どもの読書文化資本の獲得をもたらすというかたちで、子どもに影響しているといえよう。

4. 文化資本が教育アスピレーション形成におよぼす影響

では、こうした文化資本は、子どもの教育アスピレーションの形成にとってどのような効果をもっているのだろうか。以下では、出身階層(親の職業・学歴)を統制しても、子どもの文化資本が教育アスピレーションの形成に影響をおよぼすのか検討してみよう。また、あわせて芸術文化資本と読書文化資本が教育アスピレーションの形成において異なる機能をはたしているのか検討をくわえる。

4.1. 教育アスピレーションの形成における文化資本の機能

高校生の教育アスピレーション(教育年数で数値化)の形成に関わる要因を明らかにするために、次の手順で重回帰分析をおこなった。まずモデル1では、高校生の出身階層の指標として父職⁶⁾、父学歴、母学歴を独立変数として重回帰分析をおこなった。次に、モデル2では、このモデル1に子どもの芸術文化資本と読書文化資本を加えて分析した。その結果は、表2a(男子高校生)と表2b(女子高校生)に示した。

まず表2aの男子高校生の分析結果からみると、モデル1では父職と父学歴が高校生の教育アスピレーションに有意な影響をもたらしている。次に、モデル2をみると、父職と父学歴の影響は依然として有意であるが、読書文化資本もこれらに劣らぬ影響力をもっている。これに対して、芸術文化資本は男子高校生の教育アスピレーションにほとんど影響していない。つま

表 2a 教育アスピレーションの規定因(男子高校生)

独立変数	モデル1	モデル2
父職	0.124*	0.116*
父学歴	0.160**	0.166**
母学歴	0.022	-0.116
芸術文化資本		0.001
読書文化資本		0.153**
決定係数	0.047**	0.067**

注) **:p<0.01, *:p<0.05

表 2b 教育アスピレーションの規定因(女子高校生)

独立変数	モデル1	モデル2
父職	0.060	0.058
父学歴	0.177**	0.144*
母学歴	0.140*	0.089
芸術文化資本		0.115*
読書文化資本		0.343**
決定係数	0.079**	0.226**

注) **:p<0.01, *:p<0.05

り、父職・父学歴という出身階層の影響を統制すると、読書文化資本は教育アスピレーションの形成に関与しているが、芸術文化資本はそうではないことがわかる。

これに対して、表2bに示した女子高校生の分析結果によると、モデル1では父学歴と母学歴の効果が有意となり、父職の影響はほとんどみられない。他方、モデル2では、出身階層要因では父学歴の効果のみが残り、母学歴の効果は消失する。そして、芸術文化資本と読書文化資本の効果が有意なものとなる。このことから、母学歴が教育アスピレーションにおよぼす影響は、子どもの文化資本を経由したものであることが推察される。また、芸術文化資本と読書文化資本とでは、読書文化資本が教育アスピレーションにおよぼす効果がきわだって大きい。以上のことからみて、男女とも出身階層要因を統

制しても、とりわけ読書文化資本が教育アスピレーションの形成に大きく寄与していることがわかる。

4.2. 読書文化資本はなぜ教育アスピレーションの形成に寄与するのか

では、読書文化資本はなぜ教育アスピレーションの形成に大きな影響力をもつのだろうか。先にも述べたように、従来からも芸術文化資本のようなハイブロー文化への親和性よりも、読書文化資本の方が、学校で評価される言語的・認知的技能の育成につながる事が指摘されてきた (De Graaf, De Graaf and Kraaykamp, 2000, Sullivan, 2001)。たとえば、サリバン (Sullivan, 2001) は、イギリスの生徒の文化活動として、①読書活動、②テレビ視聴行動 (どんなタイプの番組を見るか)、③フォーマルな文化活動 (美術館・劇場訪問、コンサート参加)、④音楽活動 (音楽聴取、楽器演奏) をとりあげ、生徒の言語能力や文化的知識、学業成績を重回帰分析によって説明しようとした。その結果、親の社会的地位や性別、学校タイプを統制しても、言語能力や文化的知識、学業成績に対しては、①読書活動と②テレビ視聴行動は有意な影響を与えるが、③フォーマルな文化活動と④音楽活動といった芸術文化資本は有意な効果をもっていないことを明らかにした。そして、その背景として、芸術活動に代表されるハイブロー文化が学校カリキュラムに反映される度合いが、フランスでは高いものの、イギリスでは低いことを指摘している。このことからすると、階層中立的な教育選抜がおこなわれる日本においても、読書文化資本は、芸術文化資本とは異なり、高校生の言語能力や認知的能力を高めるとともに、向学学習的態度を形成し、それによって高等

教育への進学志向を強めるものと推察される。

今回の調査では、生徒の認知的能力にあたるものとして、知的柔軟性 (Kohn and Schooler, 1990) を調べてある⁹⁾。また、向学学習的態度として、学校での勉強の重要度評価を4段階でたずねてある。そこで、上記の推測を確かめるために、次のような手順で重回帰分析をおこなった。まず親の社会的地位 (父親の学歴・職業、母親の学歴) および高校ランクを統制したうえで、読書文化資本が知的柔軟性や向学学習的態度を形成するか検討する (モデル1)。次に、同じく親の地位・高校ランク、文化資本を統制したうえで、知的柔軟性や向学学習的態度が教育アスピレーションの形成に寄与しているのか分析する (モデル2)。これによって、知的柔軟性や向学学習的態度が読書文化資本を教育アスピレーションへと媒介する機能を果たしているかが検討できる。

まず、知的柔軟性の媒介機能については、表3a (男子高校生) および表3b (女子高校生) に示した。男子高校生の場合、モデル1によれば、知的柔軟性に有意な影響をおよぼしている要因は高校ランクのみで、芸術文化資本も読書文化資本も知的柔軟性にほとんど影響していない。次に、モデル2で教育アスピレーションの規定

表 3a 文化資本・知的柔軟性・教育アスピレーション (男子高校生)

独立変数	モデル1	モデル2
(従属変数)	(知的柔軟性)	(教育アスピレーション)
父職	0.010	0.038
父学歴	-0.035	0.052
母学歴	0.003	-0.065
高校ランク	0.125*	0.520**
芸術文化資本	0.030	0.030
読書文化資本	0.093	0.068
知的柔軟性	0.010
決定係数	0.017*	0.293**

注) **:p<0.01, *:p<0.05

表 3b 文化資本・知的柔軟性・教育アスピレーション (女子高校生)

独立変数 (従属変数)	モデル1	モデル2
	(知的柔軟性)	(教育アスピレーション)
父職	0.072	0.053
父学歴	-0.010	0.018
母学歴	0.098	0.003
高校ランク	-0.010	0.688**
芸術文化資本	-0.005	0.064
読書文化資本	0.142**	0.142**
知的柔軟性	-----	0.051
決定係数	0.023*	0.613**

注) **:p<0.01, *:p<0.05

因をみると、やはり有意な影響をもつのは高校ランクのみである。このことから、男子高校生の場合、読書文化資本は知的柔軟性を高めず、教育アスピレーションはもっぱら在籍する高校のランクという教育選抜の結果、形成されるものといえよう。

これに対して、女子の場合、モデル1をみると、男子とは対照的に、高校ランクが知的柔軟性に有意な影響をもたず、読書文化資本のみが有意な影響をおよぼしている。女子は、男子とは異なり、読書をすることによって知的柔軟性を高めているのである。他方、モデル2から教育アスピレーションの規定因をみると、男子と同様、高校ランクが強い規定力をもつとともに、読書文化資本が教育アスピレーションを高めている。そして、知的柔軟性は教育アスピレーションを高める効果をもっていない。したがって、知的柔軟性は読書文化資本を教育アスピレーションに媒介する働きをしていないことになる。

そこで次に、向学習的態度の働きに目をむけてみよう。表4aに示した男子高校生についての分析からは、まずモデル1にあるように、向学習的態度には高校ランクと読書文化資本が有意な影響をおよぼしていることがわかる。そして、この両者の影響の強さを比べると、高校ラ

ンクよりも読書文化資本の影響の方が強い。つまり、進学校に在籍することよりも、読書をするの方が学習を重視する態度の形成に寄与しているのである。次に、モデル2で教育アスピレーションの規定因をみると、高校ランクとともに向学習的態度が教育アスピレーションを有意に高めていることがわかる。その一方で、読書文化資本の直接効果は消滅している。このことは、読書文化資本が向学習的態度を形成し、この向学習的態度を媒介にして教育アスピレーションを高めていることを意味する。

他方、表4bから女子についてみれば、まずモデル1より、女子の向学習的態度の形成に寄与している要因は、男子と同様、高校ランクと読書文化資本である。進学校に在籍すること、読

表 4a 文化資本・向学習的態度・教育アスピレーション (男子高校生)

独立変数 (従属変数)	モデル1	モデル2
	(向学習的態度)	(教育アスピレーション)
父職	0.061	0.029
父学歴	-0.007	0.051
母学歴	0.046	0.069
高校ランク	0.132*	0.497**
芸術文化資本	-0.023	0.034
読書文化資本	0.236**	0.022
向学習的態度	-----	0.192**
決定係数	0.088**	0.327**

注) **:p<0.01, *:p<0.05

表 4b 文化資本・向学習的態度・教育アスピレーション (女子高校生)

独立変数 (従属変数)	モデル1	モデル2
	(向学習的態度)	(教育アスピレーション)
父職	-0.052	0.062
父学歴	-0.035	0.023
母学歴	0.096	-0.004
高校ランク	0.165**	0.665**
芸術文化資本	0.040	0.056
読書文化資本	0.119*	0.128**
向学習的態度	-----	0.138**
決定係数	0.063**	0.628**

注) **:p<0.01, *:p<0.05

書をすることは、ともに女子の学習を重視する態度を形成している。そして、モデル2からは、女子の教育アスピレーションが、高校ランクとともに、読書文化資本および向学習的態度によって規定されていることがわかる。読書文化資本は、直接的に教育アスピレーションを高めるとともに、向学習的態度の形成をつうじて教育アスピレーションの形成に寄与しているのである。つまり、女子の場合も、男子と同様、読書をつうじて学習を重視する態度が形成され、この態度を媒介に教育アスピレーションが高められているのである。

5. むすび

最後に、今回の分析から得られた知見を要約し、若干の考察をおこなうことにしよう。

まず、芸術文化資本についても、読書文化資本についても、親世代の文化資本には階層差がみられた。そして、父親・母親とも、学歴が高いほど、また職業上の地位が高いほど、文化資本の保有量が多いことが確認された。なお、母親の場合、専業主婦層の文化資本は、ホワイトカラー層に近い水準にあることがわかった。また、高学歴層の親では、芸術文化資本は母親が担い、読書文化資本は父親が担うといった役割分化の存在が示唆された。この点で、芸術文化資本も読書文化資本も、階層的基盤をもつといえる。

次に、文化資本の世代間伝達について検討するために、親子間で文化資本の相関をみると、芸術文化資本については父母いずれからも女子(娘)には伝達されやすいのに対して、男子(息子)には伝達されにくいことがわかった。これに対して、読書文化資本に関しては、子どもの性別に関わりなく、父子間の相関よりも母

子間の相関が高く、父親よりも母親から子どもへと伝達される傾向がみられた。

そこで、父母の社会的地位と高校ランクも要因に加えて、子どもの文化資本の規定因を探ったところ、性別によって、また文化資本の種類によって、文化資本が相続または獲得される様態に差異がみられた。すなわち、男子の芸術文化資本は、高校ランクの影響がみられず、もっぱら親から相続されるものであった。他方、男子の読書文化資本と女子の芸術文化資本は、主として母親から相続されると同時に、学校教育をつうじて獲得されるものであった。これに対して、女子の読書文化資本には、高校ランクのみが有意な影響をおよぼし、学校文化をつうじて獲得される可能性が高かった。このように、高校生の文化資本の相続・獲得は、かなり錯綜した様態を示していた。

さらに、これら2つの文化資本が教育アスピレーションの形成におよぼす影響をみたところ、男女とも主として読書文化資本がアスピレーションを高めるのに対して、芸術文化資本は女子においてのみ教育アスピレーションを高める効果をもっているにすぎなかった。そこで、読書文化資本が教育アスピレーションの形成に寄与するメカニズムを検討したところ、男女とも、読書文化資本は知的柔軟性を高めるという認知的次元ではなく、向学習的態度を形成するという態度の次元をつうじて、教育アスピレーションを高めていることがわかった。

以上のことから、学校文化が階層的基盤を欠き、階層中立的な教育選抜がおこなわれる日本社会においては、ハイブローな芸術文化資本よりも、学校文化に親和的な読書文化資本が向学校的な学習態度を形成し、それによって教育アスピレーションが形成されるものとみることが

できる。そして、たしかにこの読書文化資本は、親の学歴・職業による差異がみられるという点では階層的基盤を有するが、子どもの読書文化資本が主として学校をつうじて獲得されることを考えると、文化的再生産のメカニズムが日本社会で作動しているとはいいいがたい面がある。むしろ、学校（高校）で獲得された読書文化資本によって、教育アスピレーション（高等教育進学志望）が形成されるという学校内再生産とでもよぶべきメカニズムが働いているようにも考えられる。

しかし、今回、検討したのは、高校生というすでに教育選抜をうけた年代の教育アスピレーションである。その意味では、幼少期文化資本が初発の教育選抜すなわち中学時の学業達成や進学校への進学に有利にはたらき、その後は学校内の再生産メカニズムによって学業達成により有利な生徒に「マタイ効果」（Merton, 1973）が生じている可能性は否定できない。

事実、片岡（1998a）によれば、幼少期文化資本はとりわけ女性において中学3年次成績に大きな影響をおよぼし、その後はメリトクラティックな選抜によって学歴が達成されるという。また、武井・木村（1992）によれば、家庭にある本の冊数という「客体化された文化資本」が、親の階層的地位と交互作用効果をもって高校生の教育アスピレーションを高めているという。すなわち、両親の階層的地位が高いほど、家庭にある本の多寡が高校生の教育アスピレーションに影響する度合いも大きいという。これらのことからすれば、家族の文化資本が学校文化と複雑にからみあいながら、教育アスピレーションを形成していく過程について、さらに検討していく必要があるだろう。

注

- (1) この点で、日本の近代化に際して、いち早く西欧文化を採り入れたのが、明治期の上流階級（華族）であったことは注目に値する。そして、彼らにとって「西欧化ということは、結局のところ、西欧的と日本的、モダン的と伝統的という二重の生活を送ることを意味」していた（Libra, 1993=2000, p.120）。日本の上流階級においても、西欧文化はまず留学や外国人による家庭教師といった手段をつうじて「獲得」され、やがてそれが家族内で「相続」される文化資本に転化されたのである。
- (2) また、アメリカ社会では、文化的再生産のメカニズムは女子には作動するが、男子には働かないことが指摘されている。すなわち、デイマジオ（DiMaggio, 1982）によると、上流階層文化活動への参加や文化資本の保有が、アメリカの高校生の成績に影響する仕方には性差がみられるという。

彼は、アメリカの文化状況をもとに、文化資本が教育達成におよぼす効果について2つのモデルをたてた。1つは、文化資本は家族背景と教育達成を媒介するので、文化資本による収益は地位の高い家族出身の生徒ほど大きくなるという「文化的再生産モデル」である。これに対して、もう1つのモデルは、威信の高い文化活動への参加は地位の低い家族にとって上昇戦略となるので、文化資本による収益は地位の低い家族出身の生徒ほど大きくなるという「文化移動モデル」である。

そして、男女別に文化資本が高校の成績におよぼす影響を検討した結果、男子では父親の学歴が低いほど文化資本が成績に与える影響が大きいのにに対して、女子では逆に父親の学歴が高いほど文化資本が成績の向上に寄与

していることを明らかにした。このことから、女子については「文化的再生産モデル」が成り立つが、男子については「文化移動モデル」があてはまるとしている。

(3) さらに片岡 (1996,1998a) によれば、女性の地位形成においては、男性と異なり、文化資本は、労働市場や婚姻市場においても収益をあげる (たとえば経済的地位の高い配偶者との結婚という経済資本への転換) という。

(4) 1995年のSSM調査では、「幼少時文化資本」が以下の3項目によって測定されていた。

「子どもの頃、家族の誰かがあなたに本を読んでもらいましたか」

「小学生の頃、家でクラシック音楽のレコードをきいたり、家族とクラシック音楽のコンサートに行ったことがありましたか」

「小学生の頃、家族につれられて美術展や博物館に行ったことがありましたか」

(5) ブルデュー (Bourdieu, 1979b) によれば、文化資本には3つの様態があるという。1つは「客体化された様態」すなわち家庭にある文化的な財 (図書や美術品など) であり、もう1つは「身体化された様態」である知識や文化に対する指向性 (これはしばしば「ハビトゥス」と呼ばれる) であり、さらにもう1つは学歴や資格など「制度化された様態」である。

(6) 片岡 (1998b) は、1995年のSSM調査データをもとに、「家庭の文化環境」の社会的基盤について分析をおこなっている。その結果、幼少期の文化環境 (子ども時代の文化的経験、15歳時文化財保有) には、父職による階層差がみられ、専門・管理・事務職といったホワイトカラー層と、販売および熟練・農業といったブルーカラー層の間に断層がある

ことを指摘している。今回の分析結果も、この知見を再確認するものといえるだろう。

(7) 以下の分析では、親の学歴については教育年数を用いて数値化した。すなわち、大学卒で16年、高専・短大卒で14年、高校卒で12年、中学卒で9年である。また、高校ランクは、学科および入学偏差値・大学進学率を基準に「普通科進学校」「普通科準進学校」「専門高校」の3つに分け、それぞれに3~1の得点を与えた。

(8) 父親の職業に関しては、今回の調査では、専門職、管理職、事務職、販売職、マニュアル職、農業の6つのカテゴリで回答を求めている。この親の職業的地位については、1995年SSM調査における職業威信スコアをもとに、各職業カテゴリの威信スコアの平均値をもちいた。すなわち、専門職は66.9点、管理職は66.7点、事務職は48.6点、販売職は46.1点、マニュアル職は46.7点、農業は45.9点である。

(9) 知的柔軟性とは、物事を柔軟かつ多面的に考えられる認知的能力を意味する (Kohn and Slomczynski,1990)。今回の調査では、学校5日制に賛成する理由と反対する理由の双方をいくつあげられたかで測定している。

引用文献

- Bourdieu, Pierre. 1979a. *La Distinction: Critique sociale du Jugement*. Minit.石井洋一郎訳. 1990.『ディスタンクシオン』藤原書店.
- Bourdieu, Pierre. 1979b. "Les trois etats du capital culturel." *Actes de la Recherche en Science Sociales*.30.福井憲彦訳.1986.「文化資本の三つの姿」『アクト』1:18-28.

- Bouredieu, Pierre et Jean-Claude Passeron. 1979. *La Reproduction*. Minit. 宮島喬訳. 1991. 『再生産』 藤原書店.
- Crook, Chris, J. 1997. *Cultural Practices and Socioeconomic Attainment: The Australian Experience*. Greenwood Press.
- De Graaf, Nan Dick, Paul M. De Graaf and Gerbert Lraaykamp. 2000. "Parental Cultural Capital and Educational Attainment in the Netherlands: A Refinement of the Cultural Capital Perspective." *Sociology of Education*. 73: 92-111.
- DiMaggio, Paul. 1982. "Cultural Capital and School Success: The Impact of Status Culture Participation on the Grades of U.S. High School Students." *American Sociological Review*. 47:189-201.
- 苅谷剛彦. 1995. 『大衆教育社会のゆくえ：学歴主義と平等神話の戦後史』 中公新書.
- 片岡栄美. 1996. 「現代女性にとっての文化資本の意味：文化資本の転換効果に関する実証的研究」『関東学院大学文学部紀要』 76号. 103-128.
- 片岡栄美. 1997. 「家族の再生産戦略としての文化資本の相続」『家族社会学研究』 9:23-38.
- 片岡栄美. 1998a. 「地位達成におよぼす読書資本と芸術資本の効果：教育・職業・結婚における文化資本の転換効果と収益」片岡栄美編『文化と社会階層』（1995年SSM調査シリーズ18）1995年SSM調査研究会. 171-191.
- 片岡栄美. 1998b. 「教育達成におけるメリトクラシーの構造と家族の教育戦略：文化投資効果と学校外教育投資効果の変容」近藤博之編『教育と世代間移動』（1995年SSM調査 シリーズ10）1995年SSM調査研究会. 35-66.
- 片岡栄美. 2001. 「教育達成過程における家族の教育戦略：文化資本効果と学校外投資効果のジェンダー差を中心に」『教育学研究』 第68巻第3号. 259-273.
- 片瀬一男編. 2001a. 『教育と社会に対する高校生の意識：第4次調査報告書』 東北大学教育文化研究会.
- 片瀬一男. 2001b. 「文化資本と教育達成」片瀬一男編『教育と社会に対する高校生の意識：第4次調査報告書』 東北大学教育文化研究会. 41-56.
- 片瀬一男. 2003. 「きょうだいと教育期待・教育投資」『社会学年報』 第32号. 113-130.
- Kohn, Melvin L. and Kazimierz M. Slomczynski. 1990. *Social Structure and Self-Direction*. Basil Blackwell.
- Lebra, Takie Sugiyama. 1993. *Above the Clouds: Status Culture of the Modern Japanese Nobility*. The University of California Press. 竹内洋・海部優子・井上義和訳. 2000. 『近代日本の上流階級：華族のエスノグラフィー』 世界思想社.
- Merton, Robert, K. 1973. "The Mathew Effect in Sciences." Robert K. Merton (ed.) *The Sociology of Science: Theoretical and Empirical Investigations*. The University of Chicago Press.
- 宮島喬. 1994. 『文化的再生産の社会学：ブルデュー理論からの展開』 藤原書店.
- 大前敦巳. 2002. 「キャッチアップ文化資本による再生産戦略：日本型学歴社会における『文化的再生産』論の展開可能性」

『教育社会学研究』第70集.165-184.

Sullivan, Alice.2001. “Cultural Capital and Educational Attainment” *Sociology*. 35(4): 893-912.

武井横次・木村邦博.1992.「高校生の学歴アスピレーション：『文化的再生産論』にもとづく考察」『新潟大学人文科学研究』第80輯.1-31.

竹内洋.1995.『日本のメリトクラシー：構造と心性』東京大学出版会.

[2003年10月29日受付]